長谷宗悦の新作の「周囲」

谷 新（美術評論家）

長谷宗悦の作品については、今回のようなモチーフが定着してくる’86 年の個展（ギャラリー山口）から見ている。

バーナーで木の表面を焦がした、黒く重い印象の作品だったが、それは切れのよい“存在の符牒”というよりは、存在のものの発揚のように思えた。

この作品では、また、フィールド感がモチーフのひとつとしてあった。床に近い位置で、板を張り合わせることでできた、ややふくらみのある板面は、ちょうど庭園か池を思わせるようなフィールド感を周辺に広がろうとしている。板面の周囲は切り株か石を暗示させるようなブロックで限定づけられていた。

この水平方向への拡張を意識させる作品は、翌年の同画廊の個展で、こんどは上方への“ふくらみ”に転じる。丁度、前作の水平方向の広がりの部分を、内側から圧力をかけてふくらかせたような形象になったのである。この時、形象は、奇妙に有機的な丸みを帯びた。

今回の出品作は、それ以来のものである。かっての水平方向へフィールド感は失われ、そのかわり形象は立ち上がって、上方への動きをたくましくしている。奇妙な有機的形象も消え、立ち上がったジオメトリックなフォルムの故か、“平面の質”が視覚的によく反映されるようになっている。

この画廊（ときわ画廊）の特徴をよく生かしたとも言えるが、通りからガラス越しに見ると、床から立ち上がる物質的なテクスチュアによるレリーフ絵画のおももちがあるのではなかろうか。たしかに絵画性は強調され、作品上部では、それを暗示するかのように削りを加えて表面を変化させている。

しかし、正面から少し視線をサイドに構えると、明らかに絵画性ではなく立体感が意識化されるようになる。

さらに背後に回ると、通り側から見るとほぼフラットであった面にやや異変が生じる。それまでの作品でも見ることのできた不定形のブロックなどによってフラットな面が破綻をきたすような部分が見られるのである。

横長 5 メートル、幅 3 メートル、高さ 2.2 メートルという、かなり大サイズのこの台形の作品は、以上のように周辺で生じる視覚（知覚）によって、平面と立体の二様の質が、決してコマ割りのジャクスタポーズのようにではないが、相互性をもって、反映されている。